

クィア仏教学考

ークィア/フェミニズムと仏教は共存できるのかー

筑紫女学園大学 宇治和貴〔九州龍谷〕

ジェンダー/セクシュアリティに関する差別や抑圧が注目されるようになった現在、様々な分野でそこに着目した研究が試みられるようになった。ジェンダー/セクシュアリティに関してはフェミニズム理論・クィア理論として、現実における差別・抑圧状況が無自覚に内包する社会構造を問う学問が成立している。どちらも具体的現実における抑圧状況と、ジェンダー/セクシュアリティによって固定された社会構造への批判や告発を前提とした実践的な学問である。

そこで発見された代表的な知見として、フェミニズム研究では男性優位社会を支えるホモソーシャルと、それに伴うミソジニーやホモフォビアという差別の構造が、クィア研究ではセクシュアル・マイノリティが受ける抑圧に迫害・差別・寛容があることなどが指摘されている。こうした SOGI を基盤とする抑圧構造から自由な存在はおらず、すべての人が何らかの形で抑圧側に位置しているという当事者意識を保持する必要があるだろう。よって、仏教研究においてジェンダー/セクシュアリティに関する事項を研究対象として設定する場合には、ミソジニーやホモフォビアなどの差別や、「寛容という差別」の実践として展開される危険性に十分に注意をする必要がある。

では、仏教研究において社会の抑圧構造を対象化し、現実の不平等や差別への告発や批判を試みようとする場合どのような視座が求められるのだろうか。クィア神学では、絶対化されがちな聖書や教説をいったん相対化し歴史的産物と捉え、真理あるがゆえに表現された人間の営みの産物として再解釈することが課題とされている。

確かに、仏教における経典やそれを支える教義も、真理を根源として歴史状況における価値観の制約を受けつつ成立した人為的なものである。そこで、筆者が仏教を対象化して現実問題との関係性を理解するにあたって参考にしたいと考えているのが、二葉憲香が示した「仏教史」の方法である。二葉憲香は歴史上の主体において宗教的自覚がどのように成立したかに着目し、宗教主体の思想が、時代的契機と共に超時代的契機を有すると指摘している。その視点に立つことで、宗教思想が社会構造からの自由を有するが、超時代的契機の故に、実はあらゆる時代社会の条件に対応してさまざまな宗教思想を形成していることに注目する「仏教史」の方法を確立している。

二葉の示した「仏教史」の視点は、仏教を単なる歴史現象として対象化して終わらせるものではなく、研究対象とする主体が理解/実践した仏教を歴史状況のなかで炙り出すと同時に、研究者自身の仏教理解と現実へのかかわり方まで問われる方法として提示されている。こうした視点に立つことで、再度、仏教においてジェンダー/セクシュアリティに関する議論を展開するにあたっての前提を確認することで、教義では平等とされているが現実の差別には無自覚もしくは無反省という、非仏教的な現象を克服する視座を提示したい。

キーワード <クィア ・ フェミニズム ・ 実践 ・ 寛容という差別 >